

## 主論文の要約

**論文題目：** 日本のバイエスニック中学生における民族的アイデンティティ形成に関する研究

**氏名** : 田場あゆみ

---

### 論文内容の要約：

外国にルーツをもつ者の民族性に関する困難さは主にコミュニケーション面だと考えられているため、日本の公立学校に通うバイエスニックの子どもたちは、教師など周囲から民族性に関する問題を抱えていないと見なされることが多い。しかし、先行研究において民族的アイデンティティの葛藤を経験している者は少なくないことが示されている。そこで本論文では、民族的アイデンティティ形成過程が活性化する青年期前期において、他都道府県に比べて人数が多い沖縄県在住のバイエスニック（本論では、一方の親が日本人）中学生が民族性に関してどのような内的・外的経験をしているのかを、日本人中学生との比較や心理面接の事例を提示して質的・量的に検討することを通して明らかにし、それが彼らの民族的アイデンティティ形成過程と心理的健康にどのような影響を及ぼすのかについて検討することを目的とする。

第1章ではアイデンティティと民族的アイデンティティ、アイデンティティ交渉理論について概観し、本論の特色の一つでもある沖縄人アイデンティティの説明を行う。第2章ではバイエスニックと日本人の中学生を対象に質問紙調査を行い、民族的アイデンティティや心理的健康について量的に検討を行う。第3章では、バイエスニックに実施した半構造化面接の回答を質的に分析し、民族性に関する内的・外的経験と民族的アイデンティティに形成の関連性について示す。第4章では、投影法の一つである風景構成法をバイエスニックと日本人に実施し、民族性に関する両者の描画表現の差異について示す。第5章では、バイエスニック女子中学生の風景構成法を用いた心理面接の事例を提示し、本中学生が自分の民族性を受け入れ民族的アイデンティティを形成していく過程について考察する。第6章では第2章から5章で得られた知見を踏まえて、青年期前期のバイエスニックの民族的アイデンティティ形成について総合的に考察する。

第1章【問題と目的】では、はじめにアイデンティティ概念の説明を行い、バイエスニックの民族的アイデンティティの構成概念と発達モデル、そして民族的アイデンティティ形成過程でバイエスニックが行うとされるコミュニケーション方略（アイデンティティ交渉）について先行研究を概観し、本論の特色の一つでもある沖縄人アイデンティティについて説明した。

第2章【民族的アイデンティティ、二文化アイデンティティ、自我アイデンティティ、心理的健康の関連について】では、沖縄県在住のバイエスニック中学生 12 名を対象に、単一の民族的アイデンティティ（日本人・外国人・沖縄人）と二文化アイデンティティ（日本・外国と沖縄・外国）が、自我アイデンティティ、心理的健康との間にどのような関連があるのか、また、日本人中学生 12 名と差異があるのかについて量的検討を行った。その結果、日本人は日本人アイデンティティと沖縄人アイデンティティの両方が民族的アイデンティティとして位置づけられていた。一方バイエスニックは、沖縄人アイデンティティが主たる民族的アイデンティティとして位置づけられており、日本と外国は沖縄と異なる国・文化と認識していた。このことから、バイエスニックにとって沖縄人アイデンティティは日本人アイデンティティまたは外国人アイデンティティ同一化の葛藤や混乱を和らげるクッション的役割を果たしていることが示唆された。そして、日本人、バイエスニック間に有意差が認められなかったことから、自我アイデンティティ発達と民族的アイデンティティ発達は独立している可能性が示唆された。また、バイエスニックにおいて「日本人」「○国人」など自己規定した民族的アイデンティティへの同一化が強い群は、沖縄人アイデンティティ・探索とコミットメントの両方と外国人アイデンティティ・コミットメントの強さが民族的アイデンティティ保持の基盤になっていることが示唆された。さらに日本名と外国名の両方を持つ者は心理的健康が良好であったことから、民族性へのコミットメントの強さは心理的健康に良い影響を与えることが示唆された。一方、民族性に関する差別など嫌な経験をしたことでわだかまりが残っている群は心理的健康の不調や外国ルーツを持つことへの不安や否認があった。

第3章【民族的アイデンティティ形成に影響を及ぼす要因—半構造化面接の分析を通して】では、バイエスニックに行った半構造化面接の回答を M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）で整理・分析を行った。その結果、彼らは学校で民族性に関して褒められる、逆に差別されるなどのポジティブ・ネガティブ両方の経験をしていた。ポジティブ経験（外国語を話すことを褒められた等）は周囲への信頼に繋がっていたが、ネガティブ経験（授業中の差別発言等）は自分の民族性を否定したり、周囲からの理解を諦めたりすることに繋がっていた。また、差別の加害者・支援者ともに同級生が多く、中には教師も加害者になっているケースがあった。被差別経験によってわだかまりが残っている者は、差別されないように自己防衛で民族性を表明しない（アイデンティティ交渉方略の使用）、心を閉ざすなど理解を求めることを諦めていた。このように、学校での民族性に関する経験は民族的アイデンティティの形成・発達に大きな影響を及ぼすことを論じた。

第4章【民族的アイデンティティと風景構成法の関連について】では、先行研究概観によって民族的アイデンティティの情緒的側面などが投影されると仮定した投影法の一つである風景構成法を用いて、民族的アイデンティティと風景構成法の関連について検討を行った。その結果、日本人とバイエスニックにおいて自己規定した民族的アイデンティティへの同一化が強い群（日本人は全員）は田を具体的（描いたものが何であるか、田がどのような状態なのか）に描写できた

のに対し、同一化が弱いバイエスニックの群は、具体的に描写できていなかった。また、彩色において重色（複数の色を重ねて塗る）の使用は日本人にもバイエスニックにも見られたが、バイエスニックは同一化が強い群が重色を用いており、弱い群は用いていないという違いが見られた。日本人は田の描写と重色彩色に関連性はなかった。以上のことから、バイエスニックにおいて民族的アイデンティティ同一化と田の描写、重色を用いた彩色との間に関連が示唆された。同一化が弱い群は「田ショック」（川崎、2018）と「彩色ショック」（弘田・三船・原・岩堂、1990；皆藤、1994）が起こっていると考えられた。前者は与えられた刺激に対する受動的な感情反応で、ロールシャッハ・テストにおける「色彩ショック」と類似しており、後者は描き手自身が意識的に刺激に関与する能動的な感情反応である。田の描写が非具体的・重色なし群（民族的アイデンティティ同一化が弱い群）は田の描写が具体的・重色あり群と比べて、自分が日本人であることを強く意識しておらず、同時に外国にルーツのある親の文化・民族的背景を肯定的に感じていなかった。このように、民族的アイデンティティへのコミットメントの弱さは、風景構成法における田ショック及び彩色ショックとの関連が示唆された。

**第5章【事例研究—対人関係の困難さを訴えたバイエスニック中学生の心理面接と風景構成法】**では、「私がハーフだから皆が文句を言ってくる」と訴えたバイエスニックの女子中学生のスクールカウンセリングでの心理面接事例を考察した。面接では風景構成法を導入し、クライアントは全18回の面接の中で風景構成法を3回描いた。面接当初クライアントは、対人関係がうまくいかないのは自分の民族性にあると被害的に捉え、民族的アイデンティティの混乱が見られた。しかし自己理解が進み、また対人関係が改善するにつれて自身の二つの民族性にコミットするようになっていった。1回目の風景構成法では田ショックと彩色ショックが見られたが、面接中盤での2回目の風景構成法では彩色ショックは収まり、田ショックは弱まった。そして面接終結時の3回目の風景構成法では両方とも収束した。クライアントの対人関係トラブルの背後にあった民族的アイデンティティ形成の問題について風景構成法を導入することでより理解を深め、心理支援に活かすことができた。

**第6章【総合的考察】**では、各章で得られた知見についてまとめを行った。青年期前期のバイエスニックの民族的アイデンティティ形成について量・質的研究の両側面から検討を行った先行研究は見当たらないため、本論文は日本における青年期前期バイエスニックの民族的アイデンティティ形成の理解に新たな知見を提供できると考える。本論文が青年期前期のバイエスニックの民族的アイデンティティ形成過程の理解に果たす意義として、①日本人とバイエスニックの民族的アイデンティティ形成の違い、②他者との関係性が民族的アイデンティティ形成に大きく影響する、③民族的アイデンティティと自我アイデンティティの発達は独立している、④民族的アイデンティティ保持の程度は心理的健康に影響を与える、⑤風景構成法は民族的アイデンティティ保持や形成困難の状態を把握することが可能で心理支援の補助になる、の5つに整理することができた。そして本論文の限界について言及し、日本のバイエスニックの民族的アイデンティティ形成の理解と支援の在り方について展望した。